
逃亡

右 ムータロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃亡

【Nコード】

N42410

【作者名】

右 ムータロス

【あらすじ】

某日某所 夜

若い男がひたすらに逃げていた。

彼を追うものとは？

彼の負うものとは？

初投稿で戯言・人間シリーズ二次創作です！
文才は零ですがよろしくお願いします。

オリ主と原作キャラの会話メイン。

原作キャラは誰が出るかお楽しみに。

（前書き）

あらずじに書いた通り、経験も文才もない稚拙な文章です。
原作キャラがかなり崩壊していますがお許しを。

俺は仄暗いトンネルを必死に逃げていた。

名前？自己紹介？

そんなものはこの危機から逃れ切ったら嫌になるくらいしてやる。

まあ、ウチの家賊はちよつと特殊だから、関係ない側の人は無関心だし、ちよつとでも俺達の側に関係ある人間ならただただ嫌悪するだろう。

どちらにせよあまり良い反応は返って来ないのだ。

そして俺が危機と呼ぶ追跡者は、手短に話すなら>赤く
ただひたすらに、赤く朱く紅いのだ。

俺だって一応まだ覚醒したてとは言え、曲がりなりにもプロのプレイヤーだ。

普通の相手なら逃げたりせずいきつちり相手してやっている。

さっきまで、本当についさっきまではちよつとばかり名の知れた雑技団の下っぱと殺り合いになって戮ってきたばかりなんだが、どうやらこれが不味かったらしい。

恐らくはその時にとばちちりを喰った奴らが赤色を呼んだんだろう。まあ今更どうにもならないのだからそれはそれと置いておく事にしと。

俺達の世界では、特にウチの家ではこの赤色との接触は絶対的にタブーとされている。

なぜなら、俺達は家賊を見捨てないからだ。

聞く所によると件の赤色も随分と身内には甘いらしいが、それにしただってウチ程ではないだろう。

俺はあの赤色に勝っている所なんてほとんどないと断言出来るが、同時に家賊への絆だけに限って言うなら間違いなく勝っているとも断言出来る。

なにせもし家賊の誰かが殺されたなら、いや、事によると敵対したというだけで、相手を文字通り全滅させ殲滅するまで終わらない報復が始まるのだ。

誰かが失敗して死んでもそれは止まらない。

故に家賊に課せられたルールは一つ。

まあ、正式なルールではないけれど。

「自分が、もしくは家賊の誰かが勝てる相手以外には決して負けるな」

だからこそ人類最強の赤色と戦ってはいけないのだ。

こと赤色だけは、別に音使いのにーちゃんでなくとも家賊のほとんどが逃げ出すだろう。

それは正しい判断だ。

赤色と相對して、いや相對すくらいなら音使いのにーちゃんとか変態アニキとか逃げ出さないだろう。

でも敵對しても尚且つその状況を楽しむ、なんて事はあのくそつたれた秘蔵っ子ぐらいしかないだろう。

アイツだけは家賊と思えない。

もちろんアイツが殺されちまったらしつかりと仇討ちはしてやるが、第一にアイツの方が俺達を家賊と思ってるようには全然みえない。

変態アニキはなんだかんだってても優しいからそんな事はないと何かにつけて構っているが、家賊の為を思ったら赤色と戦ったりなんてしないだろう。

今の俺みたくどんなに不様でも必死こいて逃げ出すはずだ。

それが普通つてもんだ。

いや、言い直そう。

こんな俺が＞普通くなんて言うのはそれこそアイツ好みの傑作になっちまう。

それだけは御免だ。

逃げ出すのがウチの家賊での＞普通くだ。

ああ、他の俺達の世界の人間達の普通なら赤色もそうだが、ある意味では赤色以上に俺達家賊に関わる事の方がタブーだったりするのか？

さっきの過剰な家賊愛があるし。

……なんてね、そうは言ってもその過剰な家賊愛こそが俺達家賊での＞普通くだ。

あゝなんかわからなくなってきた。

結局は自分の＞普通くを他人に押し付けるくらいしか出来ないよな。

「…ん…ら……る…え」

嫌な、音がする。

「鬼さんこちら、手の鳴る方へ」
嫌な、音がする。

「鬼さんこちら、手の鳴る方へ」
進行方向の大分先、そこには案の定街頭もなく仄暗い中そこだけ赤く赫かがやいているかのように紅い、長身の女性が
陽気に手を叩きながら笑っていた。

くっ、なんたる失態だ。

姿が見えなくなったからと油断して余計な事を考えるうち、自然と歩みが緩やかになっていたらしい。

しかし、考え事に没頭していたとは言え俺だってプロのプレイヤーだ。

その間も周囲への警戒を怠っていた訳ではない。

そして当然トンネルは一本道。

もちろんトンネルの途中までは姿も見えていたから、例えばトンネルを戻り外へでて、反対側からこちらにくるとすればその距離はここまでのおよそ3倍だ。

いくらなんでもそんなルートは辿らないだろう。

となるとこの一本道、気づかれずに追い抜くのは普通なら随分と骨が折れるはずだ。

にも関わらず俺に気づかれる事なく追い越しているのはさすが人類最強と言った所か。

というか並のプレイヤーなら俺に気づかれて物理的に骨を折られて命ごと持っていかれるだろうに。（…ジョークだよ）

こちらも即座に臨戦体勢に入る。

と、言ってもただ心構えを変えただけで、本気の戦闘をするつもりはさらさらない。

ただ一発放つ、当たるかすらも関係ない。

その僅かな隙に今度こそ逃げ切ろう。

一瞬程度の敵対ならどうにか事実を揉み消せば家賊とあの赤が戦う事はない。

そう、こうやって家賊を第一に考えるのが俺達の普通なんだ。

家賊の為に自分を殺せ、とまでは言わないし言えない。

だが自分を多少抑えつけるくらいは必要なんだ。

俺はあんな奴とは違う。

そう考えながら相手に向かって疾走する。

向こうもさすがにさっきまであんなに必死に逃げていた男がまだ望みのありそうなうちに諦めて戦うとは考えないだろう。

怯ませるには先手こそが最善だ。

「んあ？なあに物騒な面してんだよお前。

安心しな、アタシはお前と殺り合いに来た訳じゃねえ。

依頼もなくお前らに手なんか出すかよ」

ちっ、これで先手の優位はなくなっただか。

「生憎と僕には依頼なら心辺りがあるんでね。

大方、さっきの殺り合いに巻き添えを喰った一般人が企業って所でしょう？」

もう少しで射程範囲だ。

最初の一撃に

全神経を集中する！

「ご名察。

と褒めてやりたいが残念だったな。

アタシを知ってる一般人は少ないし、知ってる企業ならたかが一人追うのにアタシを呼ぶのは釣り合わない。

お前がアタシを呼ばないとどうしようもないトコに属してるってトコまで知ってる奴は手を出したがないよ。

例えばアタシを介してでも関わりたがないだろうよ。
ま、名探偵を気取るには随分と早かったって事だな」

と、赤色はそこまで言うとしニカルに笑った。

「じゃあ一体何しに来たんですこんな所まで。
逃げていた苦勞を帰して下さい」

「簡単だよ」

そうして赤色は笑顔のまま

「お前の家賊に関して聞きたい事がある」
俺の右肘関節を極めていた。

赤色が捜してて、家賊絡みなら…
やはりアイツか。

くそつたれ、だからアイツは家賊と思えない。

こうやって実際に家賊に迷惑がかかる。

自覚してるのかしていないのかは知らないが家賊の迷惑を顧みないし一切鑑みない。

出来ればこのままこの赤色から逃げ続けて、逃げた先で野垂れ死んで欲しい。

「残念ながら知りません。

もし知っていたら他にも彼を捜している家賊を知っているので、真っ先にその人に連絡しますよ」

あんな変態に連絡する気などさらさらないが、それでも赤色に教えるくらいなら俺は変態アニキに知らせている。

「ああそうかい。

「まだ何を聞きたいかを言っていないぜ？」みたいな会話がないけどまあいいや、すまなかつたな。」

いや、言った所でこの場合、

「そりゃあ貴女との間でウチの家賊が現在抱えてる問題はアイツくらいですから。

というかその事と

アイツの居場所を知っているかどうかは無関係です」

と、冷静に返せばなんの問題もない。

「それと、素直に自分の事を俺って言うてもいいんだぜ？」

は？！

…そういえば赤色って読唇術ならぬ読心術を心得ていたのだったか。

「もちろん読唇術だってマスターしてるぞ？」

それといくら主人公のキャラが途中途中小さくブレるからって内心と発言のキャラを大きく変えてごまかすなよな、そんなんじゃない行く末は詐欺師か奇術師くらいだぜ？」

知ってたんなら黙ってて下さい。

「こらこら、地の文が丁寧だぞ？」

丁寧じゃありません！冷静な時はこれでいいんです！！

「！（こんなの）つけた時点で冷静はないだろ……」

ていうか心が読めるんだったら質問なんか意味ないじゃないですか。

「お前は本気でバカなんだな。

アタシが読めるのは

「心」だ、「記憶」じゃない。

質問しなきゃ知ってても思い出さないだろうが。

それともあれか？

質問の必要がないくらいお前はアイツの事を四六時中、心に映しだしてるのか？」

赤色はまたシニカルに笑う。

んな訳あるか！知ってたらまずは自分からあの放蕩家賊をひっぱたくわボケ。

「わかったわかった、それじゃあな」

少し歩いて自分のものらしい外車（目に痛いくらい真っ赤なコブラだった）に乗り込みエンジンをかけると、まるでまた会おうとでも言うように親しげに大きく手を振りながら去っていく赤色。

「親しげに、じゃねーよ！」

アタシとお前はもう友達なんだ、次名前以外で読んだらマジ殺すからな！！」

…なんか叫び声が聞こえてきた。

下っぱとは言えプロのプレイヤー一人を戮った後にあんな壮絶な>逆く鬼ごっこだもんな、幻聴も致し方あるまい。

「…視して……やね…ぞ…！」

また怒鳴り声が聞こえたが、今度こそ幻聴かと思う程小さな音量だった。

やはり赤色は忙しく戻って来て俺を殴りつける暇などないのだろう。平和的に話を聞こうとしたらいきなり逃げ出した俺の態度なぞ多忙の彼女の身にはさぞかし迷惑だったろう。

あ、なんか凄いさみしい優越感。

（後書き）

いかがでしたか？

なんだかんだ言って原作キャラは一人、戯言・人間シリーズの用語も敢えてあまり出さなかったんですが楽しんでいただけたでしょうか。

今後もネタさえ浮かべば他のキャラと絡ませたいです。

ちなみにオリ主の名前や容姿、二つ名や武器などの諸設定は決まってるので次の機会があれば紹介したいです。

感想を楽しみに待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4241o/>

逃亡

2010年10月21日04時40分発行